

氏 名	平 川 都 子 ひら かわ ざと こ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 87 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	心内膜炎の病理知見補遺 —特にアレルギーの立場からの観察—

論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 前川孫二郎 教 授 岡 本 耕 造
--------	--

論 文 内 容 の 要 旨

著者がここに研究の題目とした心内膜炎は、循環器系疾患の中でも最も重要な疾患でありながら、なお幾多の疑問を有している疾患である。成書によれば、心内膜炎は各種の心臓疾患の中でも最もしばしば見られるものであり、また最も重要な意味を持つ疾患とされている。それにもかかわらず、その真の原因にいたっては、幾多の論説の対称として研究されつつあるものの、未だ的確な点を欠くことが少なからず、病理学的にもさらに深く究明せられねばならないことが多いといえる。

心内膜炎については、種々なる病原説の中でも諸種の細菌感染による病変として考えられるほかに、リウマチ性病変に関連せるアレルギー性炎症を基礎とする考察がしばしば行なわれている。今回臨床的にとくにリウマチ性と診断されたものおよび既往歴にリウマチ性疾患を有するものを除外し、各種細菌により惹起されたと考えられる心内膜炎屍について、全身性のいわゆる内膜アレルギーという立場から、心内膜のみにとどまらず、心実質および肝、腎、肺の各臓器について、とくにその末梢血管の病変を追究した。その結果次のとき成績を得た。

- 1) 心臓には典型的なアッシュョッフ体は発見できなかった。
- 2) しかし、変性細胞のスタレ状配列を示す所見その他アッシュョッフ結節形成の前段階または変形と考えられるものがあった。
- 3) 各臓器においても血管壁の線維素様膨化、内膜の剝離、硝子様化、空泡形成、壁の2重構造などが著明で、また静脈疣贅を認め 粟粒動脈瘤をも認めた。
- 4) 血管の変化は、概して細小血管に多く、大および中等度血管には変化が少なかった。
- 5) 1例において、肺胞腔内にマッソン体を数個発見した。
- 6) 今回の検索による組織変化特に血管壁の変化は、アレルギー機序に基き、アレルギー性変化として全身末梢血管に惹起されたもので、汎内皮症と解釈される。

論文審査の結果の要旨

さきに鈴江教室の田代は心内膜炎の病理解剖学的研究をこころみ、とくにその心臓において、いわゆる心内膜炎とはいうもののそれはひとり心内膜そのものに病変が見られるだけでなく、心臓筋層に介在する冠動脈、ことにその内皮にも著明な退行性病変がいろいろの形で現われるものであることを確認した。

今回著者は、このような田代のこころみた考察をさらにおしひろげ、主として各種細菌性心内膜炎屍の材料につき、全身性のいわゆる内膜アレルギーという立場から、心内膜はもちろん、心筋実質およびさらに肝、腎、肺などの各内臓器管について、とくにその末梢細血管の病理組織学的研究をこころみたのである。その結果およそつぎのような成績を得たのであった。

まず、著者が調査した範囲内では、心臓には典型的なアッシュョッフ体の形成は確認されなかった。しかし心内膜における新旧の疣贅形成はもちろんながら、心間質における変性細胞のスタレ状配列が見出されること多く、また細小血管壁に関連してアッシュョッフ体の流産型とでもいえるような巨大変性細胞の集積巣が発見され、これらはみな、そこにアレルギー性反応機序の存在を示唆するところのものがあると考えられた。他の臓器においても、主として細小血管壁の線維素様膨化、内膜の諸種退行性病変が認められ、また静脈疣贅、粟粒動脈瘤などの形成が認められた。また肺にはマッソン体の出現を認めしめるものがあったことはなほだ興味がふかい。

以上のような所見から著者は、心内膜炎の病理像としてアレルギー性機序にもとずき、アレルギー性組織変化として全身末梢血管に惹起される血管壁病変の存在を指摘し、本病症の解析に Allgemeine Endotheliose 汎内皮症の概念を導入すべきことをといているのである。

このように本研究はこの方面におけるまったく新しい興味深く、かつ有益なる内容のものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。